

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：11201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23652007

研究課題名(和文) 漆紙文書を利用した漢代から唐初期における『論語』の変容に関する文献学的研究

研究課題名(英文) A Philological Study of Transformation of "Lunyu" from Han Era to Earlier Era of Tang: with Specific Concern of "Urushigamimonjo"

研究代表者

藪 敏裕 (YABU, Toshihiro)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20220212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円、(間接経費) 720,000円

研究成果の概要(和文)：漆紙文書や日本出土木簡『論語』、『論語集解』を中心に敦煌本、開成石経、日本旧鈔本など校勘作業を行ない、日本出土木簡『論語』テキストの持つ書誌学的体例を考察した。何晏『論語集解』については日本旧鈔本、敦煌出土本の体例とほぼ同じであり、奈良期の地方官衙にまで集解系統のテキストが浸透していたのではないかと推定した。

漢代～六朝期の儒教経典の変遷をたどる上で重要な問題である、漢代経学の古文系・今文系のテキスト問題、解釈の対立について考究した。特に、漆紙文書『古文孝経孔氏伝』が持つ古文系(隸古定か?)とされる文字について検討を行い、今文古文問題とは異なる問題をふくむのではないかと推定した。

研究成果の概要(英文)：Focusing on Urushigamimonjo and Japan-undearthed mokkan Lunyu and Lunyujijie, we examined variations in writing among Dunhuang, Kaichengshijing, and Post-Heian manuscripts, which leads to considerations on the bibliographic forms found in the Japan-undearthed mokkan Lunyu. Heian and Lunyujijie share almost the same form with Post-Heian manuscripts and Dunhuang, and can therefore be hypothesized that this text permeated regional government offices in Nara Era. This study considers conflicting interpretations between Guwen and Jinwen texts of Handaijingxue, which is extremely important when we trace the changes found in the Confucius Canon from Handai to Liuchao Era. Our special concern is placed on the ancient style of the characters which the Urushigamimonjo Guwenxiaojing kongshizhuan is assumed to contain.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：漆紙文書 『古文孝経孔氏伝』 平壤貞栢洞364号墳出土竹簡 『論語』 韓国出土木簡

1. 研究開始当初の背景

1980年代以降日本各地で木簡・漆紙文書が出土し、その出土物に儒家經典である『論語』や『古文孝經孔氏伝』の残簡が含まれている。出土例は、これら儒家經典の日本伝来の下限時期を確定することに有効であった。しかし、従来はこれら漆紙文書を中国文献学の文脈に組み入れて論じることは少なかった。本研究では、この漆紙文書『論語』ならびに『古文孝經孔氏伝』および出土木簡『論語』等を、テキスト校訂のための資料として利用することを企図した。

2. 研究の目的

現行の儒家經典の文献テキストは、宋代以降の刊本を元に開成石経や敦煌出土テキストを利用し、清朝考証学などの校勘学の成果を取り入れた校訂テキストが用いられている。本研究はより古いテキストに近づくことを目的として、出土文物(漆紙文書・出土木簡)や日本伝来の旧鈔本を校勘の資料として用いて、唐・開成石経以前のテキスト(以後これを「南北朝隋テキスト」とよぶ。)を復原することをめざした。このことは、

(1)『論語』については、漢代の出土『論語』と南北朝隋テキストとの比較により、漢代から隋唐期のテキスト変容過程を知ることが可能となる。

(2)『古文孝經孔氏伝』については、中国で本書が唐代に亡び、中国側の資料では、その開成石経以前の実態が不明であることから、日本側の資料を用いることで『古文孝經孔氏伝』の南北朝隋テキストを推定復原でき、本經書の歴史的問題とされる、劉歆偽作説を考える上で必要な材料を提供することが可能である。

という版本以前の個別テキスト復原を目的とした。さらにこの結果を基に、經書一般の漢代から六朝・隋唐の儒教經典テキストの変容の法則性を推測することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究は先ずテキスト確定のために、文字の異同については校勘学の方法を用いた。文字の異同発生の要因として、文字の字形については、写巻・石刻史料に出現する異体字・俗字化現象の歴史の変遷を追う漢字字体史の研究成果を採用し、本研究で使用する資料で出現する異体字・俗字の使用年代を個々に確定し、その使用数が最大値を示すところをそのテキストの書写年代あるいは伝来祖本の書写年代とする方法を用いた。また、文字異同の音韻的要素の解明については、清朝考証学の仮借の方法を用いた。

4. 研究成果

研究成果について年次を追って報告してゆく。平成23年度は、主に全国で出土している『論語』および『孝經』の漆紙文書・木簡資料等の収集にあたった。胆沢城跡地区の『古文孝經孔氏伝』の写真版、多賀城地区の『古文孝經孔氏伝』の写真版、飛鳥京、飛鳥池遺跡、石上遺跡、藤原京、平城京、長屋王邸、平城二条大路、東大寺、徳島県観音寺遺跡から出土した木簡『論語』本文のデータ入力を行った。調査の結果、胆沢城跡の漆紙文書『古文孝經孔氏伝』が隸定古字とされる特異な異体字を含み、テキストの鈔写年代もしくは伝来祖本の年代を推定する重要な手掛かりとなることが期待された。この『古文孝經孔氏伝』の字体・字形から南北朝隋テキストの復原を試みる方法と同様に、木簡・および漆紙文書『論語』の書体を通じて南北朝隋テキストの復原あるいは祖本の確定が可能と考え、木簡の影印資料の収集の必要を感じ、特に木簡『論語』最大文字数の出土を見た徳島県観音寺遺跡77号木簡『論語』の木簡写真の複写資料物を収集した。漆紙文書『古文孝經孔氏伝』との比較のため、広く日本鈔本の複写物を収集した。天理図書館蔵天平断簡、猿投神社本、三千院本、建治本、錦小路本な

どの奈良時代から戦国時代末にわたる抄本の複写物を入手し、隸定古字とされる使用例を調査した。また静嘉堂文庫に隸定古字とされる字体を論究した文章を収める最上徳内の『孝経白天章』に附属する早川敬明『古孝経古字考』の存在を知り、同書を調査し影印を入手した。

また、日本の漆紙文書や日本古抄本と文字の校勘、字体(隸定古字とされる字、異体字、俗字)の比較を行うため、隋唐期の敦煌文書やトルファン出土文書に収められる『論語』および今古文の『孝経』の影印複写物を収集した。さらに、徳島県観音寺遺跡77号木簡『論語』が「觚」と呼ばれる形状になっていることから、韓国の6-8世紀の金海出土の『論語』との校勘、書体比較の必要を感じ、木簡の撮影された資料や、関係の論文を収集した。

なお、『古文孝経孔氏伝』の出土位置を確認するため胆沢城跡の漆紙文書を発掘した奥州市埋蔵文化財調査センター所長の佐久間章氏の案内で現地を視察、同地で発掘された漆紙文書『古文孝経孔氏伝』が当時の官衙敷地内での発掘であることを確認、テキストとしては朝廷の地方機関の所有のものであり、習書木簡などに見られる文字の重複、テキストの省略など校勘上の不安定さがない点で、

(1) 南北朝隋テキストならびに日本の奈良期テキストの原貌を推定するのに有効なテキストである。
(2) 日本旧鈔本の鎌倉-室町期テキストの校合の時代的起点とすることが出来る。
との結果を得た。

平成 24 年度の研究成果については、全国から出土した漆紙文書・木簡資料等の本文データを、阮元本『十三経注疏』所収の『十三経注疏校勘記』および陳舜政『論語異文集釈』を用いて校勘し、『論語』本文の異同を調査した。徳島県観音寺遺跡 77 号木簡の『論語』の本文は、現行本と著しく異なる。その理由を解明するため、徳島県観音寺遺跡 77 号木

簡の形態が「觚」とよばれる多方体であることに注目した。「觚」に書かれた『千字文』は、国内では奈良・飛鳥池遺跡からも出土し、中国では敦煌漢簡の觚に書かれた『急就篇』、韓国でも金海・鳳凰臺遺跡出土の觚に書かれた『論語』の出土例があり、いずれも経典学習のための「習書」とされている。観音寺遺跡出土の『論語』経文の異同理由を「習書」と考える見方も可能であるが、『論語』本文の文字転倒や省略などから「習書」以外の用途も排除できないと推定している。今後の検討が必要である。

また、『古文孝経孔氏伝』については、隸定古字とされる文字、異体字、俗字を字形の上から、胆沢城遺跡・多賀城遺跡出土の漆紙文書『古文孝経孔氏伝』と天理図書館蔵天平断簡、猿投神社本、三千院本、弘安本、建治本など早期古抄本『古文孝経』ならびに戦国期の錦小路本『古文孝経』との比較を行った。その結果、漆紙文書『古文孝経孔氏伝』の伝える隸定古文とされる字および異体字は、日本に伝来した隋唐期の劉炫本の原姿を留めるものであると推定した。この点は、清朝考証学の学者たちが『古文孝経孔氏伝』を日本での偽作と見なすことへの反証を提供したことになる。一部で日本偽作説がみられる『古文孝経孔氏伝』テキストの系統研究が、今回の研究成果により新しい局面を迎えることが期待される。また、今日『古文孝経孔氏伝』は太宰春台の校訂本が底本として広く使用されているが、今回の漆紙文書および早期旧抄本による調査によれば、劉炫本の日本伝来当初からの文字が太宰春台により改訂されていることを示しており、今後太宰春台の校訂がどのようなものであったか『古文孝経』テキストの逐字再検討する必要があることが判明した。

平成 25 年度の研究成果は、漆紙文書『古文孝経孔氏伝』と日本出土木簡『論語』『論語集解』を中心に校勘作業を通じて隋唐期の

テキスト復原に挑戦した。日本出土木簡『論語』テキストが、書誌学的体例を考察するうえで史料的价值を持つものとした。書名、章題の体例が何晏『論語集解』本の日本旧鈔本、敦煌出土本の体例とほぼ同じであり、『論語』単経の木簡であっても、『論語集解』から何晏注の部分を除いた単経本に依拠したテキストであったことが推定された。このことは、奈良期には地方官衙にまで『論語集解』系統のテキストが浸透していたことを示すものである。徳島観音寺遺跡出土『論語』木簡に使用されている文字の字形から、その祖本は隋代のものではないかと問題提起できたことの意義は大きい。またテキストの異同については、平城京 193 次 SD5300 堯曰篇の出土木簡残簡から、漢碑に残るような異文が日本にも伝わっていた可能性について指摘できた。今後も日本での出土木簡は増えることが想定されるが、この字形・字体や各種遺文との校合の重要性を示唆するものである。日本史、考古学研究者が出土木簡の釈文を作成する際、現代の流布するテキストに依拠して釈読するだけでなく、同時代およびそれ以前の異文や別字体を含むテキストに注意すべきであると言えよう。中国思想史研究者にあっては、日本出土漆紙文書・木簡資料が中国思想史研究における版本以前の経書テキストの校訂のため有効な一次史料であることから今後とも出土状況に注目し積極的に校勘作業に利用することが重要だと言える。

『古文孝経孔氏伝』について漆紙文書および日本旧鈔本『古文孝経孔氏伝』の字体・字形を中心に中国からの伝来祖本の姿を探求したが、胆沢城・多賀城地区で出土した『古文孝経孔氏伝』が字形・字詰めなど書誌学的形態からみると後世の日本旧鈔本とに強い類似性が見られ、今後、日本で孝経の木簡類・漆紙文書が出土した際には、日本旧鈔本を参照して異体字・俗字を十分に意識した釈文を作ることが必要となろう。

胆沢城・多賀城地区の漆紙文書『古文孝経孔氏伝』に残る隸定古字とされる字を通じて、テキストの伝来時期やテキストの成立時期まで実証しようと試みた。写巻・石刻史料に出現する異体字・俗字化現象の観点からの検討による、テキストの書写年代あるいは伝来祖本の書写年代は、隋唐期のものであることがほぼ推論できた。これは、劉炫の再編集テキストとほぼ同時代のものであることを意味する。このことは日本に残存する『古文孝経』テキストが、劉炫の再編集時期とほぼ同時代であり、今後劉炫による再編集か再編集と称する彼の偽作かを再考する上でより正確なテキストを提供するという意義を持つ。こうした観点から、時代を遡り『古文孝経』の漢代から六朝期にかけての断代テキストについて復原可能か検討した。劉海宇氏は漢代には『今文孝経』のみ流布し『古文孝経』の出土例がないことから、遣隋使・遣唐使により日本に齎された六朝期の『古文孝経』についてより詳細な再分析が必要としている。

『論語』については出土資料の数的限界から『論語』テキスト全般の校訂には至らなかったが、奈良期から『論語集解』本系統の浸透が見られることから、日本に現存する室町旧鈔本『論語集解』テキストの文字異同についてもその淵源が相当早期（奈良期）にまで遡及できる可能性がある。こうした今後の日本旧鈔本『論語』の資料的価値について新たな可能性が提言できたことも、本研究の成果の一つと言えよう。

今次研究成果は、漆紙文書や儒教経典の出土木簡数は数が限られたとしても、日本に残る旧鈔本を用いることの可能性を提示したものと見えよう。日本旧鈔本で多くのテキストが残されている『詩経』、『尚書』については、中国では先秦・漢代の出土資料があり、隋唐期の敦煌出土テキストがあるため、本研究の方法論を用いて先秦・漢・隋唐・宋以降という断代テキストが確定できる可能性が

ある。また本研究ではテキストの文字の異同が解釈の異同にまで影響を及ぼす例を『詩経』に見える「緝熙」の解釈をめぐって論じた。この成果は、今後、本研究で得られた方法で『詩経』『尚書』のテキストに応用した場合の成果、つまり従来のテキストクリティークが、阮元の校勘記や旧鈔本の異同が単に唯一の原テキストの存在を前提としていたものが、時代によって並立するテキスト群が存在したことを示唆するものである。またその並列テキストの存在が今古文問題の内容である可能性が高いことを示した研究意義は大きいものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8件)

石川泰成、日本出土木簡・漆紙文書を用いた『論語』『古文孝経孔氏伝』の隋唐テキストの復原、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無し、56号、2013年、p.87 - p.114

石川泰成、復原隋唐時期 古文孝経 的可能性 通過分析日本出土漆紙文書和古鈔本、第五届世界儒学大会學術論文集、査読有り、2013、p.321 - 330

藪敏裕、上海博物館戦国竹簡書『孔子詩論』所引『詩』的理解、第五届世界儒学大会論文集、査読有り、2013、p.331 - p.336

石川泰成、錦小路本『古文孝経』隸定古文竝異体字疏証(3)、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無し、55号、2013、p.29 - p.50

石川泰成、再考証旧鈔本 古文孝経 中的“古文”性 通過分析日本東北地区出土漆紙文書 古文孝経、漢字研究、韓国慶星大学漢字研究所、査読有り、第7号、2012、p.183 - 198

石川泰成、錦小路本『古文孝経』隸定古文竝異体字疏証(2)、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無し、53号、2012、p.27 - 39

石川泰成、錦小路本『古文孝経』隸定古文竝異体字疏証(1)、九州産業大学国際文化学部紀要、査読無し、52号、2012、p.29 - 51

藪敏裕、奥州胆澤城址出土漆紙文書 古文孝経孔氏伝 的伝播、第三届世界儒学大会論文集、査読有り、2011、p.331 - p.

336

〔学会発表〕(計 2件)

藪敏裕、『詩経』所見“緝熙”解、第六届

世界儒学大会、2013年9月28日、中国曲阜

石川泰成、再考証旧鈔本 古文孝経 中的“古文”性 通過分析日本東北地区出土漆紙文書 古文孝経、第四届韓中日漢字文化国際論壇、韓国慶星大学漢字研究所、2012年8月27日

〔図書〕(計 1件)

藪敏裕ほか、海がはぐくむ日本文化、東京大学出版会、2014、p.209 - p.217

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藪 敏裕(YABU Toshihiro)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20220212

(2) 研究分担者

石川 泰成(ISHIKAWA Yasunari)

九州産業大学・国際文化学部・教授

研究者番号：10289358

(3) 連携研究者

劉 海宇(LIU Haiyu)

岩手大学・平泉文化研究センター・特任准教授

研究者番号：70649441